地域支援センター「みみらんど・郡山」

令和５年度 第４回きこえとことばの基本研修会

テーマ 「聴覚障がいと手話について」
講 師 本校教諭 桑名 真之介 中村 紋圭 鴫原 育子

11 月 14 日（火）、第4回きこえとことばの基本研修会を開催しました。今回のテーマは「聴覚障がいと手話について」です。本校教員３名に講師をお願いし、なぜ手話が必要なのか、情報量格差とは何かなど、ご自身の体験をもとに話していただきました。

“音声言語”を使う聴こえる人“マジョリティ”と、“手話”を使う聾者や難聴者“マイノリティ”との間で「自分はどっち」「自分が努力しないといけない」と思ったこともありました。聾学校で“手話”を共通のコミュニケーション手段とすることで、会話が通じ合う喜びを感じ、「聴こえないことは悪いことではない」と思うようになりました。

家族とは、“音声言語”でコミュニケーションをし、聾学校では“手話”でと言語を使い分けていました。“て話”は、聴覚活用の有無によらず、自分の思いを表現したり、言葉や内容を理解したりするために、とても良い手段です。“手話”も“音声”も両方大切な言語として、考えてくれたら嬉しいです。お互いに通じ合って繋がっていけるように、歩み寄って、理解し合っていきたいですね。

「聞こえにくい」と言えるまで、10年ほど必要でした。補聴器や手話への視線、配慮してもらうことが迷惑ではないか等が気になり、自己肯定感が低下して「心の低温火傷」を起こしている時期がありました。家族や友人等、様々な方々との出会いから、「きこえにくい自分」を「自分らしく」として再構築することができるようになりました。

“手話”は、きこえない・きこえにくい人との共通言語だと考えます。口形や表情なども大切にして、“手話”や“音声”、“文字”などの視覚情報等も一緒に使っていけたら良いと思います。どれを選ぶかは、きこえない・きこえにくい当事者です。支援者の役割は、たくさんのコミュニケーション手段を身につけることができるようにしてあげることだと思います。

聾学校の中学部に転入した当初は、日常生活に必要な手話だけを覚えれば良いと考えていました。雑談や生徒同士でしか分からない手話を覚えようと思ったのは、同じ場所で同じ障がいをもつ友達といるのに、会話の内容が分からず、寂しさを感じる事があったからです。この出来事から、逆の立場にいる人の気持ちも考えるようになりました。手話を必要とする人がいる時に、手話を使わないで話が盛り上がっていたら、その人の気持ちはどうでしょうか？聴覚障がい者同士で情報量の格差が起こらないように、「手話」を手段として使ったり、マスクを外したりして、その場の全員が分かる環境づくりを大切にしてほしいと思います。

「聴覚障がい者」との関わり方を、「きこえる」ことを基準にしていませんか？
一人一人で実態もコミュニケーション手段も違うことを理解してほしいです。どんなサポートが必要かを、児童生徒に考えさせたり伸ばしたりすることが、支援者の仕事であると思います。

【参加者の感想】

- ３名の先生方が生の声を届けて下さり、とても感慨深く拝聴いたしました。今は人工内耳や補聴器の進化で手話がなくても大丈夫と聞いたことがありましたが、手話の大切さや共通言語としての手話を身につけて学習していくことの大切さがよく分かりました。情報保障という言葉もとても大切なことだと改めて感じました。とても貴重なお話、ありがとうございました。
- 先生方の人生の道のりについて経験談をお話しいただきありがとうございました。自己理解、受容、周囲との調整等、現在に至るまでの心境変化と必要な配慮について、生徒とのかかわりやセンター的機能に活かしたいと思いました。